

7. 黒崎町におけるお講

榊 原 章 代

- I はじめに
- II 黒崎町におけるお講
- III お講の様子
- IV お講の変化と現状

I は じ め に

黒崎町では、ほとんどの人が浄土真宗に属し、お講を行っている。そしてその種類は様々であり、お講というものがどういったものか全く知らなかった私は、それが一体どういったものか知りたかった。そこでまず、室町時代後期に始まったといわれるお講が時代を経て、どのように現在の黒崎町で行われているお講へと移り変わってきたか、また現在の黒崎町のお講は人々にとってどのような意味を持ってきたかなどについて、黒崎町での聞きとり調査をもとに考えていきたいと思う。

II 黒崎町におけるお講

この節では黒崎町におけるお講について概要を記述し、現在だけでなく過去に行われていたものや、黒崎町を含む地域のお講が住民の生活のなかで果たす機能にも着目して考えてみたいと思う。

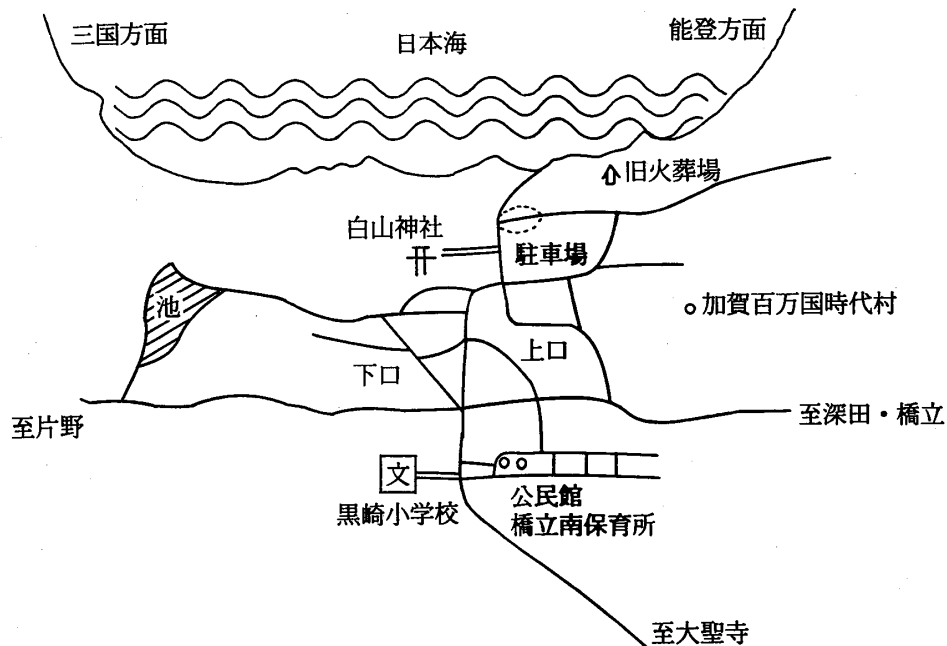


図-1 上口、下口

1. おやじお講

以前は黒崎を上口、下口と2つに分け、毎年交互に個人宅を順番に会場として行った。「おやじお講」という名称だったが誰でも参加することができ、東本願寺と加賀市内にある教務所の同行衆の中の赤袈裟^{あかげさ}が相続講集めなどの世話役をし、主に深田称名寺、月津興宗寺、大聖寺願成寺から順番に僧侶を呼んだ。経費は赤袈裟の中でも最も偉い人が老人から集めた。しかし、次はどの家で行うかということを経験していなかったことや、老人のいない家で行ったり行かなかったりするうちに次に行く家の順番が分からなくなったり、世話役だった赤袈裟が亡くなったり後継ぎがいなくなったりしたこと、1990年頃に老人会が主催するようになり、毎年2月に公民館で行われるようになった。老人会員が参加し、経費は老人会費から賄われている。深田称名寺と小塩妙徳寺の住職を交替で呼ぶ。その内容は、1. 御和讃、2. 御文^り、3. 男性で亡くなった人のお経、4. 説教という順に行われる。

2. ニ お 講

以前は1月と2月の年2回、婦人会が主催して行われていた。誰でも参加することができ、深田称名寺、月津興宗寺、大聖寺願成寺から僧侶が呼ばれ、婦人会長宅でとり行われた。1976年頃に仏壇の供わった新しい公民館ができると年に1回、1日中（1996年は1月28日）に公民館で行われるようになった。仏壇の準備は男性が行うが、それ以外の準備は女性が行う。その内容は1. 御和讃、2. 御消息²⁾（御文）、3. 女性で亡くなった人のお経、9. 説教である。経費は現在の参加者兼主催者である婦人会から賄われる。以前は午後2時頃から行われていたが、現在は午前中に尼お講をし、その後婦人総会をするというようになった。

3. 若い衆お講

春（2月25日）、秋（11月25日）の夜に年2回、青年団役員の家で行い、読経をするために深田称名寺から僧侶を呼んだ。経費は青年団費から賄われ、誰でも参加することができたが、若い人のお講に対する関心が薄れたためか、青年団がなくなったことなどから1995年頃に若い衆お講はなくなった。2月25日の春のお講では³⁾「コウジわかし」を作って腹一杯呑み、11月25日の秋のお講のときには、ボタモチ（大おはぎ）を作り、その中へ塩をたくさん入れたものや、ナンバ（トウガラシ）を入れたものを作って誰がそれを食べるのかと悪ふざけをした。

4. 各寺の門徒のお講

北陸地方は浄土真宗の盛んな地域である。黒崎町においてもまた、人々は浄土真宗大谷派の東本願寺の門徒であり、その世帯のお手次寺は、深田称名寺は約40世帯、月津興宗寺は約40世帯、大聖寺願成寺は約9世帯であり、それぞれにお講が存在する。

その中の報恩講は、今日様々な形態があるが、寺が存在しない黒崎町では特に、在家ではあるが寺と門徒を結ぶ役割をもつ道場で、僧侶のかわりを勤める道場主が講で重要な役割を果たしていた。

①報恩講まわり（つとめ報恩講）

報恩講の日の昼間に各寺の住職、役僧が門徒の家を一軒当たり25分弱程かかって訪ね、御和讃と御文（深田称名寺では「聖人一録」）を読む。その際、現在でも道場が機能している深田称名寺と月津興宗寺は道場主が道案内役をし、道場により決められた世話方が僧侶のためにお昼弁当の係を手配する。道場が機能していない大聖寺願成寺では、門徒の中でお宿^{やど}を決め、そこで僧侶は着替えや休憩をするが、黒崎町では門徒数もそんなに多くないので案内役はいない。各門徒とも、昼間に報恩講まわりをし、夜に道場報恩講を行う。そして、この2つを合わせて報恩講と呼んでいるようである。

②道場報恩講

(1) 深田称名寺門徒

黒崎町での深田称名寺門徒の道場報恩講は1985年頃までは12月25日に行われていたが、現在は毎年11月下旬の夜（1995年は11月25日に行われた）に行われるようになった。黒崎町の深田称名寺門徒の人が道場に集まり、称名寺の住職がお経と覚如によって記された親鸞^{おんろ}の伝記の御伝鈔を読む。

(2) 月津興宗寺門徒

毎年11月下旬（1995年は11月23日に行われた）の夜に行われる。黒崎町の月津興宗寺門徒の人が道場に集まり、興宗寺の住職にお経を読んでもらう。

(3) 大聖寺願成寺門徒

道場が機能している時は道場で行っていたが、機能しなくなってからは公民館で毎年11月20日過ぎに大聖寺願成寺門徒の人が集まって行われる。願成寺の住職がお経を読む。なお、いずれの場合もお講の経費は門徒から賄われる。

③一月上旬、二月下旬

各門徒ごとに行われるお講で、大聖寺願成寺門徒は3月までに1回、深田称名寺門徒は1月20日前後、2月20日前後の年2回、月津興宗寺門徒は1月15日頃、2月15日頃の年2回行われる。深田称名寺と月津興宗寺の場合は、道場により門徒の中から決められた世話方が個人宅持ち回りの順番決めなどの手配をし、寺から僧侶を招いて行われる。報恩講の時に僧侶からもらったもの（例えば、箸とかサランラップ等）のお返しとして1月の時に門徒はお年玉^{ねんとう}として1人1,500円程度出す。

④おより

農閑期に当たる11月から3月までの間、毎月1回、組ごとに行っていた。組とは、黒崎の中を近くの家ごとに6つに分けたものである。およりは組の中の個人の家で順番に行われ、他のお講とは異なり寺から僧侶を呼ぶということをしないので、組の中の誰か（大体は決まっていた）が御和讃と御文を読んだ。その後、大根の煮物、煮豆、いりこ、コウジわかしなどといっ

たものを参加者（組の者）で共食したが、終戦後によりは行われなくなった。

⑤お七夜

12月20日過ぎの夜、各道場で門徒ごとに行われていたが、終戦後に行われなくなった。詳しいことについては不明である。

5. 御命日々ごめいにちび

親鸞上人の命日の28日に行われる28日講と先代本願寺法主の命日（1995年の時点では8日）にほぼ毎月、深田称名寺で行われるもので、お講ではないという人もいるが、ここではお講の中に入れておく。参加者は特に決まっておらず、大聖寺や片山津からもやって来るが、大体は近隣の人で、黒崎町からも参加する。年代としては老人が多い。経費はお説教のお礼として賽銭のような「おみやかし」が1人200円ずつ集められ、これはお講の後に参加者が共食するための食事を作った女性にも支払われる。

6. 組 お 講（北浜お講）

大聖寺教務所が加賀市を東西南北の4つの組に分け、各組の中に数名ずついる東本願寺世話方宗が主催となり、各組順番に春と秋の年2回行う。東本願寺大谷派の寺から僧侶を呼び、希望する個人宅等で100～200人程度の規模で行われた。経費は順番がまわってきた組の門徒の者で賄われたが、他のお講に比べて負担が大きかった。黒崎町は海の方に位置するため、深田、片野、高尾、橋立、小塩、田尻、小塩辻、宮地、野田、岬、塩浜、篠原、篠原新、伊切、新保、しば山と一緒に北組に属していたが、1975年頃に黒崎町では組お講を行わなくなった。

7. 坊もり講

黒崎町で行われるお講ではないのだが、この地域の寺が当番制で回り持ちして行われる。深田称名寺もこの中に含まれている。坊もりとは、寺の主婦のことで、本山から御消息をもらってこの主婦達を中心になって行っている。以前は毎月13日に行われたが、1992年頃からは毎月20日に行われるようになった。誰でも参加することができ、主に近隣の人が参加した。1980年前後までは世話人に食事を出したが、今ではおつゆを出す程度になった。経費は参加者が持ってくるお講銭で賄われる。

8. 知 恩 講

加賀江沼地域全体を対象とするお講で、この地域にある浄土真宗大谷派の寺全ての約40カ寺の住職が主催している。寺の忙しい時期を除き毎月8日頃に、年10回程行われる。場所は寺同士の持ちまわりで、会場となった寺は宿寺しゆくじと呼ばれる。宿寺になった寺の住職は、知恩講の準備や接待、御消息読みをして忙しいので、説教は宿寺の住職ではなく、他の寺の住職により行われ、このお講は一日中行われる。

9. 示 談 講

加賀江沼地域全体の門徒が対象で、毎月1回各町持ち回りで行われる。寺が主導するのではな

く、地区の世話役といった代表者が持ちまわりの当番表を作り、説教をする寺の住職、場所（講宿）などをとり決めた。以前は個人宅で部屋の戸を取り外して行ったり、天気の良い日には家の外にむしろをひいたりして行ったものだが、部屋の戸を取り外して大部屋をつくることのできるような家のつくりがなくなったことからか、公民館や寺が会場となるようになり、大体は組お講と同じ日の午前中に組お講を行い、午後に示談講をというように行われている。

Ⅲ お 講 の 様 子

黒崎町におけるお講の代表的な例として、ここでは1995年11月23日にとり行われた月津興宗寺門徒の報恩講について、その様子を述べたいと思う。

1. 報恩講まわり

報恩講の日は、日中に各寺（この場合は月津興宗寺）の門徒の家1軒1軒を住職と役僧で手分けして、道場主の案内で1軒につき25分弱程度訪れ、御和讃と御文を読む。僧侶たちの昼食はお昼弁当の係になった人が用意する。

表-1 1995年11月23日の月津興宗寺門徒
の報恩講の手順

日 中	報恩講まわり
PM 7 : 30 ~	道場報恩講
	1. 正信偈
	2. 念 仏
	3. 和 讃
	4. 回 向
	5. 御 文
	6. 御明志を集める <small>おみやかし</small>
PM 8 : 05	7. 休憩・法事のお知らせ
	8. 法 話
	9. 恩徳讃
	10. 報恩講費集め

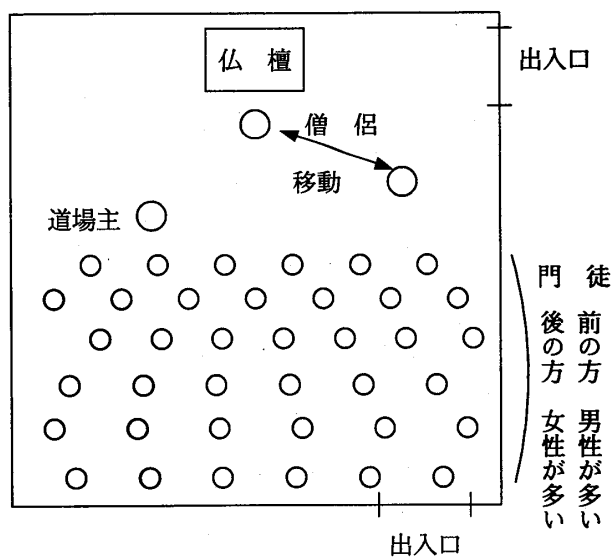


図-2 参加者の配置

2. 道場報恩講

夜（PM 7 : 30頃）になると門徒の人々が道場に集まる。この日に集まった人数は40～50人程で、中高年層が主で、女性の方が多かった。そして、僧侶が仏壇の前に座り、正信偈、念仏、和讃、回向の順に唱えて、その後⁴⁾御所様（御文、消息文）を読む。それから、御明志^{おみやかし}というお寺への賽銭のようなものを集め、住職と道場主が部屋から出ていき休憩となり、人々が和気藹々と談笑している時に法事のお知らせの紙を、その年に法事のある家の門徒の人に配る。その後、僧侶と道場主が部屋の中に戻り、僧侶が法話をする⁵⁾。法話が終わると、恩徳讃を読み、報恩講費

として1人当たり5,200円程度集める。

以上が黒崎町におけるお講の例であるが、ここで、黒崎町と隣接する深田町について少し触れたいと思う。深田町では以前、小お講、中お講、^{なか}大お講という3つのお講があり、村を3つにして所属を分けた。大お講では3合^{ます}升の入った袋をまわしてお米を集め、おかず作りをした。大お講だけは宮村の人も参加したが、小お講、中お講は深田町の人だけが参加し、1月、7月、11月に行われ、夜に僧侶のお勤めがあった。経費としては、深田町でお講があった頃（具体的にいつ頃は不明）の金額で見ると、お講銭は通常のお講の時は20円で、報恩講や講員亡人の時は25円、宿料（家人）は通常で70円、報恩講で100円、御法礼（僧侶へ渡る）は100円、本山へ10円、お布施は通常は不明、報恩講では190円だった。しかし、深田町のお講は農業から会社勤めをすることによる人々の生活様式の変化、家の造りの変化によりお講を行えるような家の減少、食事を大量に作る用意がなくなったことなどから失くなっていった。

IV お講の変化と現状

黒崎町のお講はかつて、同じ信仰をもつことによって人々の団結心を高めたり、地域内での同世代の交遊機関としてや、村の社会組織や経済組織としてなどの様々な役割を持っていたと思う。また、この頃は、ほとんどの人々の生業が農業だったこともあり、人々の生活リズムも似ていて、農閑期に当たる晩秋から初春にほとんどの人々がお講を行う時間的余裕があったし、家の造りも部屋と部屋の仕切りの襖^{ふすま}を外すことにより大人数を収容できる大部屋を作ることのできるものであった。しかし、人々が会社勤めをするようになると、農業を生業としていた頃と違って、1年を通して働きに出るため、お講を行うような時間的余裕が減少し、家の造りも人々が集まってお講を行うのには適さないような形態となり、お講の後に皆で共食をするための大量の食事を作る準備をしなくなったことや、テレビなどの娯楽が発達したためお講の娯乐的楽しみが薄れていき、若い人があまり関心を示さなくなったこと、道場が機能しなくなったことに見られるように宗教的行事における先導者がいなくなってきたことなどから、黒崎町の現在のお講は、おより、若い衆お講のようになってしまったものがあり、その数は減少してきている。また、ひとつのお講が行われる時間については、お講の後で皆で食事をするということが失くなり、お茶やお菓子を出す程度になったことから分かるように短くなっていて、時間帯についても午前中だけで済ませてしまうものもある。お講の主体についても、おやじお講を老人会に任せるというように、お講の担い手を団体に任せてしまったものもあり、担い手の年齢層も中高年が主となっている。

こういったお講が門徒の間で下火になっていく傾向が黒崎町に限らず起こったためか、人々の信仰を導く側（教務所等か？）が1965年頃に同朋会運動を始めた。これは、各地区や寺の門徒単位で、ひとつの同朋会を20～30人程の、主に年配の方や中堅年齢層から組織した。形式としては御消息はなく、僧侶がお勤めをした後説教をし、その後信仰上の座談会をするといったもので、月に1

度のペースで2～3時間行われる。参加者は時間的余裕や熱意のある人が主で、公民館や家、寺などを会場として行われる。また、年に1回、教務所が主導して5月か6月の日曜日（1996年は5月26日）に同朋大会というものが行われる。これは午前9時頃に始まり、午前中講師の話を聞き、午後は参加者が班ごとに分かれて信仰の話し合いをし、それをグループ代表が発表し、その後講師のまとめを聞き、午後4時頃に終了となる。参加人数は教務所に入れる人数に制限があるので250～300人程である。しかし、こういった同朋会運動は今までのお講と比べ革新的体制で人々が慣じみにくかったことや、純粋な信仰心だけではないものも入ったためか、あまりうまく浸透していかなかった。

以上のように、黒崎町住民の関わるお講について述べてきたが、現在のお講は以前に比べ果たす役割も減り、先に述べた様々な理由からも分かるように、下火になってきているのではないかなと思う。また、こういった傾向に対しての同朋会運動もそれほど拮据りを見せておらず、黒崎町でもその存在を知っている人はいるが、参加する人はいないようである。このようなお講の現状に対してこの先、今以上にお講が盛んになる可能性は少ないと思えるし、むしろ逆に減少の方向に向かってしまうのではないかなと思う。現に今の若い人たちはお講には大して興味を示しておらず、このままでは未来のお講の担い手が確保できるかどうか心配だからだ。聞きとり調査をした中には、「年を取ると心の^よ拠り所がなくなるのでお講を拠り所とするようになる」という意見もあり、少し安心したが、先のことはやはりどうなるか分からない。私個人としては、人々の和氣^{あい}藹々とした雰囲気を持つお講が今後もずっと存続することを望むが、これからのお講の未来は明るいとは言えないのではないかなと思う。

注

- 1、2、4） 本願寺の歴代の上人が仏教の教えを書いた手紙。はじめは蓮如上人が浄土真宗の教えを簡明に述べた手紙で、これを講の集まりなどで読み聞かせ、布教に使用した。また、御消息には本願寺（本山）から寄付のお礼としてのものもある。黒崎町では、御文は親鸞上人が仏教を分かりやすく皆へ書いた手紙で、御所様は参る人へ渡した親鸞上人の書きつけであるという話を聞いた。また、黒崎町の尼お講の御消息は、江戸時代始めの受取御消（本山の維持費を払ったことの受取の証拠）である。
- 3） 米を蒸してコウジ菌を混ぜたものに、おかゆを混ぜ、薄めてわかし、砂糖を入れたもの。
- 5） 1995年11月23日の月津興宗寺門徒報恩講の法話の内容

報恩講とは、11月28日の親鸞上人の御命日を縁にし、毎年1回、本山、各寺、真宗門徒らが行うものである。松任市の暁鳥先生によると、報恩講とは、真宗門徒独自の暦の上での1年のしめくりであり、また1年の始まりの日でもあるという。そして、報恩講の日は1262年に亡くなった親鸞様にゆかりの人やお世話になった人が集い、親鸞様の御前に参って座る日であるという。集まった人々は親鸞上人が残した言葉や、親鸞上人が何を大事にして生きたかという上人の生き様を報恩講を通じて1人1人が確認することにより、最も分からないものであろう自分自身のこの1年の生き様がどうだったか深く振り返る場である。